史料番号 6302

幸昌夫人たき子の「江の島日記」

原胤昭旧蔵資料調査報告書（３）より

江の島日記

さいつ頃、母君鎌倉鶴ケ岡八幡宮より江の島詣てせさし給ふ時の道すがらの名所古跡の御物語、珍らしきことゞもにて、よき折もあらば参けいいたし度、年月思ひ居候所、はからずも清川氏のさそひにて、卯月十二目新橋ステムシヨより、八時十五分の車にて神奈川へ九時過着、神奈川台を過て茶店に休、人力をやとひ、戸塚くらやにて中食、此所二階見はらしよくしばらく休、此所を出て藤沢遊行寺裏門迄車にて、夫より参詣、寺内所々見物、かた瀬祖師堂へ参けい、七面山へも参けいたし度と思ひ候へとも、此所石坂まかリ／＼て数多く、あまり高きゆへ下にて拝し、御若き御方々はいさぎよく石坂を御登り、半より腰をおして御もらい被成候方も有、又供之者の草りをかりて御下りの御方もありて、この身は高見の見物にはなして下より見上候処、一しほおもしろく、此所を立出、かしわやと申茶店にてやすみ、此家ふしんもきれいにて三階より所々一覧、こと／＼く目先替り、景色何ともいわんかたなくしばらく休、もはや島へは程近しと、皆とり／＼の咄しながら、永き砂山もいつかこして浜辺へ立出、又此処のけしき波のうち寄るさま、いかにも珍らしく、すこし物すごくもおほへ、今宵は波音みみに付、ふし兼候なとゝかたりて、江の島立花やえ五時過着、此日は朝より小雨に候へども、かく別障りにもならず候、昼よりつよく降、二階より所々の景色詠、又雨のけしき一しほよく、此所庭内にすこし小高き所ありてめさし、紅葉・さくらいまさかりにで、風につれ浜辺えちり行さまいかにも見事にて、思わずも

うち寄る　波のこへ行　桜哉

扨、此茶屋清川氏年月なじみの所にで、殊之外のもてなし、上段之間へ通し、夫々あいさつに出て、其内風呂かげんもよきとて、ゆかた持来り、追々入湯もすみて、直にてうし盃・膳部其外肴特出、誠に肴あたらしく、しばらくさかづきをめぐらし、家内之者も出て種々取はやし、支度もしまひ、雨はしきりにふりさみしく、三味せんをかりて、つめ引も有、楽寝いたすもありて、皆々思ひ／＼と咄しにて時うつり、九時過ふしどに人、夜具等もこと／＼くきれいにて、先に思ひし波音も少しもみゝに障らす、よきこゝちにふしぬ。

あくる十三日七時過おき出、あちこち明て詠候処、殊之外景色よく、もやふかくかすかに山もみへ候様、しばらく過て朝飯、一寸一口等誠によやく支度もすみて、此家仲案内にて御山まいり、石坂多くまかり／＼て参けい、岩屋近き処茶屋にて休、自分は差つかひにて、岩屋え参けい出来兼、茶屋にしばらく待居、あちこちと詠つゝ、岩間へ波のうち寄るさま、はるかと海中に忽ぼし岩とて高さ五丈計も有よし、りやう舟なとも出居、色々珍ら敷ことゝも、もやふかく、かすかに山もみゆる様に思われ、其内雲もうすくなり

もや晴て　みれはそこなり　春の山

なとゝ寝ことうかみ、其内皆々此処え帰り、岩屋の咄しも承り、此茶屋にて御穴いわひ

とて、小さきたんこくしへさし、人々へおいわい被成候とて差出し、中には田舎より参けいに参り候ばゝあ等は、そんなたんこは内ていくらもたへ居候なとゝ申ことはり候も有、と／＼にておもしろく、一同右たんこさざい坪焼等にて、茶くみかはし、残りおしくも立花屋え十一時頃帰る、此処にては三階へ留り、夫々待受いたし有て、昼支度貝細工なと取寄、土産物調、一時過此家を立出、ふら／＼浜辺をあゆみ、七里ケ浜え出る。此処けしきよく、欠石等もひろいて上の茶屋へ休、こゝにて鎌くら八幡前まて車をやとひ、車夫名所古跡の案内して、道すがら極楽寺と申寺有、此門内両がは桜あり、いまを盛りにて、此さくらは八重ひとへと申伝へ、一本にて両用咲くよし。　夫より朝比奈通しへかゝり、此処車にてはこし兼、あゆみよほどの難所にて、皆々くたびれ足にてこっけいもあり、よふゝゝとかうもりをちからにこして、又車にて道すがらはせの観世音へ参けい、此仏体三丈三寸と申事、大仏へも参けい、此近き所にはせを翁よみ候

　夏草や　つわ者ともの　夢の跡

と申碑有よし、車夫申候。　程もなく八幡前え立出、御宮之参けい、けいだいもひろく御宮もこふ／＼といたしかねて、もとふとく覚、むかし此処にて兜あらため御座候こと等と物がたりして立出、もはや暮近く車をいそがせ、金沢東屋え七時頃着、此所相とまり多く取込居、よふ／＼座敷え着、其内湯之案内もありて追々入湯いたし、二階よりあちこちと詠、空もくもり、折々晴間より月も出、直前に入江有て家根舟うかみ、ほのかにおける月うつり、景色いたってよろしく、追々支度もすみ、九時過ふしぬけ、家随分ふるく少々まかり居候に思われ、夜具等も前夜とは大ちがい、コツ／＼にてきみわるく、とり／＼咄しして、一しほきょうをもよふし、あくる十四日晴、六時頃おき出、夫々支度済、八時頃立出、直に横浜迄車をやとひ、道すがら能見堂茶屋にて休、此処老母八景の案内可致と、能見堂え上り、遠目かね取出し、夏島・猿島・忝ほし島其外色々と物語承り、此所を出て十一時過横浜へ着、夫よりき車にて一時過、采女丁清川氏え帰る。

　母君は歌の道まなび続ければ、江の島道の名所古跡にて歌もよませられ、道すがらのとゝも心のまゝかゝせられ、一しほおもしろきことゝ此身も色々珍らし所見物いたし候まゝ認メ置たく思へと、何もわきまへなく、殊に筆もまはり兼、只々見物いたし候侭を後の楽しみにもと書しるす。

明治十三年四月十二日